

編集後記

<古沢元之助>

「胃と腸」が発刊されてから10年になるが、その間、消化器疾患の診療に携わる多くの医師に優れた論文を紹介してきた本誌の功績は大きく、それら貴重な知見は本誌に特集されたテーマの主題論文からだけでなく、個々の掲載症例から得るところも多い。

今回の症例・研究特集号では、胃および腸における肉腫やリンパ濾胞増殖症など、粘膜下病変の症例が多く、粘膜下病変の種々相を知ることができる。これらの疾患は、日常の診療には、それほど多く遭遇する疾患ではないが、それだけに貴重な、また臨床病理学的に興味ある症例であり、それらの症例から得られた知見は疾患の本態を考察する上に大きな役割を演じているようにも思われる。

消化管診断学の進歩、特に内視鏡への生検の導入によって、質的診断が、ある程度の正確さをもってできるようになった今日、私は常日頃から、生検に頼り過ぎ、安易な内視鏡診断にならぬよう心掛けてきたが、これらの掲載症例を読んでいるうちに、生検標本の判読のむずかしさと慎重さが必要であることを痛感した。

研究欄における北島らの胃癌に対する選択的動脈造影法を、癌の浸潤範囲、深達度の判定の一助にしようとする試みは、今後の実地臨床での発展が期待されるであろう。鎌田らの胃巨大帯状潰瘍の論文、唐沢らの胃出血性びらん時の十二指腸粘膜の内視鏡所見の論文は、急性胃・十二指腸病変に対して行われた emergency endoscopy による病態究明であり、胃および十二指腸の急性潰瘍性病変の発生機序を考察する上に興味ある論文であろう。

<編集> 早期胃癌研究会